

平成 3年12月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

## 多摩川の三万年橋

青梅市内の、多摩川に架かる日向和田の神代橋より約 100 メートル上流と、御岳の御岳橋より約 50 メートル上流には、“万年橋跡”と呼ばれる橋台が川の両岸に残っています。いずれも橋台の幅は約 2 メートルで、水面からの高さは約 10 メートルです。これらの橋台は、現在の神代橋や御岳橋が架けられる以前の古い時代のものですが、多摩川の右岸（南岸）と左岸（北岸）を結ぶ重要な役割を担っていました。

御岳の万年橋は、享保 8 年（1723）にはすでに架けられており、大正 8 年に、現在の御岳橋のすぐ下流側に「旧御岳橋」が架けられるまでの、200 年間以上にわたって利用されていました。現在の橋は昭和 4 年（1929）に架けられたものです。日向和田の万年橋がいつ架けられたかは不明ですが、おそらく江戸時代中期頃でしょうから、この橋も長い間、両側に住む人びとには、大事な橋として利用された事でしょう。

市内のほぼ中心を、西から東に流れ下る多摩川は、面積が約 1240 平方キロで、延長は約 138 キロです。たくさんある日本の川のうちでは、面積では第 50 位、長さでは第 23 位の大きさです。

川の流れは、流域の人びとに大きな恵みをもたらしていましたが、場合によっては災害を及ぼしたり、場所によっては、大きな障害になっています。とくに南北の往来では、古くから交通の障害になっていました。このため、流れが穏やかな下流では、渡し船によって往来をし、一方、上流では、流れの幅がせまい所に簡単な橋を架けて、行ったり来たりしていました。流れる水の量が少ない時は、それでもよかったのですが、大雨のときには交通が断絶してしまい、場合によっては 10 日間前後も往来が出来ない時も、たびたびあったようです。下流の平野部では川幅が広いために、橋を架けるわけにもいかないので、水が少なくなるまで気長に待った後、船で渡っていました。上流では、いつまでも待っているわけにもいかないので、川幅が狭いところに、「万年橋」が架けられました。“万年橋”とは、いつでも渡れる橋という意味です。

日向和田の万年橋より下流で橋が架けられたのは、明治 30 年のことでした。それまでは青梅の人々はもちろんのこと、羽村や福生の人々も、大雨の時にはこの日向和田の神代万年橋を、急ぐ時には利用していました。江戸時代の多摩川には、このほか奥多摩町の海沢にも万年橋があり、あわせて「多摩川の三万年橋」とよんでいました。

(文責 角田清美)